

## 心理学における「活動」と「行動」

——ファム・ミン・ハクの所説を中心にして——

教育心理学教室 高 取 憲 一 郎

### 1. はじめに

ソビエト心理学、および社会主義諸国の心理学において、「活動」の概念の占める位置の重要性については、今さら強調する必要はなかろう。「活動」概念は、心理学がよって立つところの重要な方法論的、理論的基礎を構成しているばかりではなく、アメリカ合衆国で隆盛を迎えて現在もなおその勢力を保っている行動主義心理学の「行動」概念と、その内容と構造において鋭く対立しているという点においてもまた、とりわけ重要な社会的、歴史的、イデオロギーの意味をもっている。

かつて、筆者は、ソビエトの心理学者ルリヤとカナダの心理学者ヘップを比較しながら、両者の方法論の差違と、それと密接に関わりあう意識に対する見解の差違について詳細に論じた<sup>(1)</sup>。ただ、その時点においては、ルリヤの神経心理学的分析とヘップの行動主義的方法の認識論的發展の深化の水準の差違を強調するあまり、「活動」概念と「行動」概念の対立が有するところの心理学全体への展望の違い、およびそこから派生する人間観の違いという点については示唆するだけで終り、なんら具体的な展開がなされないままであった。

ソビエト心理学では、レオンチェフが「活動、意識、人格」という著書で、「活動」概念の理論的分析と展開を精力的に行なっているが、アメリカの行動主義心理学の批判的分析と関連させつつ、「活動」概念を展開させ、さらにその基礎の上に立って、「活動の心理学」の構築を提起しているのは、レオンチェフの弟子でベトナム社会主義共和国のファム・ミン・ハクである。ソビエトの心理学研究者、とりわけレオンチェフのグループのなかに、「活動」概念に基礎づけられた「活動の心理学」の立場からの、行動主義心理学の検討という仕事が見当らない現状において、ハクの一連の論文は貴重な労作と考えられるし、「活動」概念と「行動」概念を考察するための重要な手がかりを与えてくれるものと思われる。「活動」概念と「行動」概念の比較検討という作業は、また、「行動」概念の批判を媒介として「活動」概念の内容の深化と肥沃化を図るという、いわば「活動の心理学」をうち立てるための一つの過程として考えられるのは当然のこととして、ベトナム人のハクにとっては、ベトナム戦争の当面の敵であり、戦後にまでもなおその強大な影響力を残しているアメリカ合衆国の思想的・イデオロギー的・社会心理学的影響力と、まさに直接的に対峙せねばならぬという国家的・民族的な必要に迫られるという側面も多いにあったことは、容易に推察されうる<sup>(2)</sup>。その意味では、ハクのほうがレオンチェフよりもはるかに厳しい社会的・実践的要請のうえに、アメリカ合衆国の主要イデオロギーの一つである行動主義心理学の「行動」概念、および人間観を分析し

解明するという義務を負わされているとも考えられるのである。

本稿では、ハクの諸論文とレオンチェフの著書を紹介しながら、心理学における「活動」と「行動」という二つの概念を考察していくことにする。

## 2. ベトナム心理学の現状とファン・ミン・ハク

本論に入る前に、ベトナム心理学の現状とファン・ミン・ハクについて簡単に紹介しておこう。ベトナムの心理学界の現状については、ほとんど情報らしいものがわが国に紹介されていないので詳しいことは述べることはできない。ただ、岩崎允胤氏らの報告<sup>(3)</sup>、あるいは岩名泰得氏の報告<sup>(4)</sup>によれば、ハノイにあるベトナム社会科学院哲学研究所<sup>(5)</sup>のなかに、弁証法的唯物論、史的唯物論、ベトナム思想史、倫理学、美学、ブルジョア哲学および南ベトナムの哲学批判、自然科学の哲学などの研究部門と並んで心理学部門が設けられており、部長はドー・ロン (Do Long) である。したがって、心理学関係の論文も、同研究所発行の研究雑誌「チェットホック」(Triết học; 哲学) に掲載されている<sup>(6)</sup>。

ファム・ミン・ハク (Pham Minh Hac) についても詳しいことはわからない。ただ1980年7月に東ドイツのライプチヒで開かれた第22回国際心理学会のCongress News No. 4<sup>(7)</sup>にハク氏とのインタビュー記事が掲載されている。それによると、「ベトナム戦後の今の時代においては、ベトナムにとっては心理学の建設という課題よりも一層重要な課題があるように思われるにもかかわらず、ベトナムでは心理学が急速に発展しているのはなぜか」という記者の質問に答えて、ハクは次のように述べている。「ベトナム政府は、科学の発展ということを非常に重視している。民族解放闘争の過程で生まれたベトナム社会主義共和国の若い心理学は、ベトナムの一層の発展にとってたいへん重要であり、現在、約1000名の心理学関係者がいる。ベトナムの心理学も、世界の現代心理学の成果から大きな影響を受けているが、とりわけ、ソビエトおよび他の社会主義諸国の心理学の成果には多くを学んでいる。」次に、「ベトナム心理学の特徴とは何か」という質問に対する答は、以下のようである。「ベトナムの心理学者は、ベトナムの教育を再生するための科学的基礎づけをすることによって国の発展に貢献している。とりわけさしせまった問題は、新生ベトナムに必要な社会主義的人格を形成するための科学的根拠を提供するために、人格心理学の研究をすることである。」最後に、「ハクの専門領域とは何か」という質問に対しては、ハクは、「人格形成過程を明らかにするために、疎外された (distorted) 人格発達の過程を現在の中心的研究分野としている」と答えている。

以上のインタビュー記事によって、ベトナム心理学界のあらましと、ハクについての若干の情報は得られたと思う。とにかく、ベトナム心理学では、アメリカ思想の影響の強い南部の人々の教育と人格形成をどうするか、という困難な作業も含むところの新生ベトナム社会主義共和国の人間形成、人格形成という課題を解決することが当面の大きな使命である<sup>(8)</sup>。

さて、ハクは、現在、ベトナム教育科学アカデミーの副総裁であるが、その前10年間ほどモスクワ大学に留学し、ルリヤ、レオンチェフ両教授の指導を受けたようである。われわれが入手している彼の文献は、ほとんどがその当時、両教授の指導下に書かれたものであるが、全体的に見ればレオンチェフの影響が強いと言える。われわれの入手している彼の文献を以下に年代順に列挙しておこう。

1. Short-Term Memory in Patients with Left (Dominant) Frontal Lobe Lesions. *Psychologia*, 1974,17,186-192.

2. View of Soviet Psychologists on Behaviorism. *Psychologia*, 1976, 19, 163-172.
3. Значение Ранних Работ Л. С. Выготского для Развития Советской Психологии. ВЕСТН. МОСК. УН-ТА. СЕР. ПСИХОЛОГИЯ. 1977, №3, 11-20.  
(ソビエト心理学の発展に対するヴィゴツキーの初期の著作の意義, モスクワ大学通報, <心理学>, 1977, No 3, 11-20) なお, この論文は Радзиховский, Л. А. との共著である。
4. Судьбы Бихевиоризма : Социальный Бихевиоризм Скиннера. *Вопросы Психологии* 1977, №2, 73-82.  
(行動主義の運命: スキナーの社会行動主義, 心理学の諸問題, 1977, No 2, 73-82)
5. Zur Frage des Gegenstandes der Marxistischen Psychologie. In A. Kossakowski (Herg.) *Psychologie im Sozialismus*. Berlin: VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1980, 280-284.

文献1は, 左半球前頭葉損傷患者の短期記憶を研究したものであり, ルリヤの指導で神経心理学的分析を行なっている。これは, われわれの手元にある彼の唯一の実験論文である。文献2, 3, 4, はレオンチェフの指導の下に活動概念と行動概念の比較検討, および行動主義批判を行なったものであり, 理論的論文である。文献5は, おそらくベトナムに帰ってから著したものと考えられるが, レオンチェフ理論に従いながらマルクス主義心理学の対象と方法について述べ, 「活動の心理学」あるいは心理学における「活動—人格アプローチ」を提起している。そこで本稿では, 1以外の理論的論文を紹介しながら, 論述していくことにする。

### 3. 「マルクス主義心理学の対象」論文(文献5)について

文献5は, ハクがソビエト心理学, とりわけレオンチェフの活動理論を吸収しながら「活動の心理学」のスケッチを叙述したものである。この文献では, ソビエト心理学のいくつかの主要な概念と中心的テーマが散見されるので, それらを簡条書き的に抜き出して, 活動の心理学の全体像を概観してみたい。

#### (i) 活動の心理学 (Psychologie der Tätigkeit) :

「マルクス主義的な活動概念を基礎とする心理学は, マルクス主義心理学として理解することができる。換言すれば, 人間の対象的活動というマルクス主義のカテゴリーは, マルクス主義心理学の概念装置の中で, 中心的な重要な位置を占めている。要約すれば, マルクス主義心理学は活動の心理学と呼ぶことができ, それは新しいタイプの心理学である。」(P. 280, 下線部は原文斜字体)

#### (ii) 活動の心理学へのヴィゴツキーの貢献:

「(ヴィゴツキーの論文“行動の心理学の問題としての意識 [1925]”は——高取 ) 活動の心理学の最初のプログラムと見なすことができる。この論文の中で, ヴィゴツキーは次のような思想を中心的な見解としていた。すなわち, 個別科学としての心理学は, 歴史的・社会的・労働的・意識的存在としての人間の意識および行動の研究にその努力を向けねばならない。この出発点は以下の帰結に至る。すなわち, 心理的なもの, すなわち意識そのものの問題の解決は, 動物の行動と人間の行動を区別するところのまさにあの行動様式の分析を通じてのみ見出すことが可能である。このような行動様式のなかの中心的なものは労働活動 (Arbeitstätigkeit) である。」(P. 280-281)

#### (iii) 活動の心理学へのルビンシュテインの貢献:

「ルビンシュテインの“カール・マルクスの諸労作における心理学の諸問題 [1934]”という有名

な論文において、人間の心理学への活動論的アプローチは、新しい、明確で正確な形態にまで洗練された概念把握に至った。マルクス主義心理学の全体的な概念構造にとって、“主体と客体の弁証法 (Dialektik von Subjekt und Objekt)”としての活動という理解を基礎に置くことの不可避性が強調された。“主体と客体の弁証法”としての活動という思想によれば、人間と人間を取り囲む現実との関係は、活動的相互関係 (tätige Wechselbeziehung) として決定される。」(P.281)

(iv) 意識と活動の統一の原理:

「(意識と活動の統一の原理は——高取 )、現代心理学の最も重要な成果の一つである。だがしかし、この原理の方法論的意味に真に対応しようとすれば、活動の心理学的・対象的内容を活動の構造の心理学的分析によって明らかにすることが必要不可欠である。」

「(レオンチェフの研究は以下のことを明らかにした。——高取 ) 連合の成立や心像の生成過程は、実践 (Praxis) や行為 (Handlung) や目標 (Ziel) というような人間の活動にとって特徴的なカテゴリーなしでは理解することができない。実験的事実は次のことを明らかにした。つまり、さまざまな刺激の効果は、被験者の行なう活動の内容に依存している。意識された目標に向けられた主体の行為は、連合をひき起こすための、そしてあれこれの材料が刻印づけられるための根本条件である。」(P.281)

「(ガリペリンの研究は以下のことを明らかにした。——高取 ) 概念や言語的思考の形成と発展は、社会的・歴史的遺産の体系の獲得の過程である。その獲得過程は、操作と行為の適切な組織化の基礎の上に生ずる。主体が獲得する概念は、現実の模写の一般化でもあり、またその模写の形成にとって必要不可欠な操作や行為の体系の一般化でもある。…………… (ガリペリンにより——高取 ) 具体的な心理学的材料にもとづいて、生きた活動の過程における対象化 (Vergegenständlichung) の過程、ならびに人類の創造した対象的世界を主体が獲得する過程が、初めて明確に証明された。

(ガリペリンによれば——高取 ) それぞれの行為は、行為の像 (Bild) と労働手段の像 (Bild) を含む定位的基礎 (Orientierungsgrundlage) の上において常に経過していく。その像は活動によって現実化される。対象はこの過程においては活動の目標である。そのとき、対象は主体の表象のなかにおいては、活動が向けられている未来の結果として与えられている。この過程は、次のことに基礎づけられている。すなわち、行為主体は初めの状態と終りの状態との間の関係をつくり出す。換言すれば、主体は動機 (Motiv) と活動目標 (Tätigkeitsziel) を互いに結びつけている関係を認識している。」<sup>(9)</sup> (P.281-282)

「(ザポロジェツは“随意運動の発達 (1960)”という著書のなかで、以下のことを明らかにした。——高取 ) 随意運動 (Willkürbewegung) は、活動と同じく常に対象的性格をもっている。随意運動が行なわれる対象的条件を活動の内容へととり込むためには、主体はこの条件に関して定位的行為 (Orientierungshandlung) を行なわねばならない。この定位的行為を媒介として、頭の中にこの条件の模写がつくり出される。その模写が随意運動を調節する。」(P.282)

「(以上に述べてきたことは、レオンチェフの次のテーゼを支持する。——高取 ) すなわち、意識現象としての心理的機能は、活動を遂行するための真の契機 (Moment) である (『活動、意識、人格』を参照のこと)。しかし、このように理解することは、全体的人間の活動の心理学化を行なうということの意味しない。そのようにすることは、心理的なものと具体的活動との同一視に通じる。このような誤った理解は、マルクス主義的な活動のとらえ方と行動主義的行動概念との明瞭な区別の欠如によって生ずる。」(P.282)

「(レオンチェフによれば——高取 ) 心理的反映は、その反映を生み出し、その反映によって媒

介されるところの人間の活動の契機と不可分である。」(P.282)

(V) 活動を分析する必要性:

「心理的現象は、人間の活動の構造の分析の基礎に立って研究されねばならない。すべての心理的機能と心理的過程は、活動の構成要素として研究されねばならない。すなわち、個々の心理過程は次のような視点によって考察されねばならない。どのような動機が心理的機能の形成と経過を決定するのか、心理的機能はどのような行為から構成されているのか(どのような意識的目標へ心理的機能は向けられているのか)、心理的機能はどのような手段(Mittel)によって実現されるのか。」(P.282)

(VI) 主観性と人格

「(主体は——高取)心理活動の主観性(Subjektivität)と呼ばれる。主観性は主体の能動性(Aktivität)と熱情(Leidenschaft)を含む。」(P.283)「主観性は、当然のことに、さまざまな進化の段階においてさまざまに現われる。人間の人格の水準においては、主観性は人格の意味(ある出来事的人格にとっての意味)において現われ、具体化される。」(P.283)

「活動に基礎を置くアプローチは、活動により生ぜさせられ、活動の内的契機として現われるところの心理的な新形成物(Neubildung)としての人格という考えを仮定している。人格は、それゆえに、主体と客体との相互関係の特性をある程度まで自ら決定するところの、先天的に決定ずみの“内的諸条件”の総体として理解することはできない。」(P.283)

(VII) 活動—人格アプローチ(Tätigkeits-Persönlichkeits-Zugang):

「研究対象であるすべての心理現象は、さまざまな活動が実現される過程において、しかも人格の活動として、分析される。(原文斜字体)」(P.284)

「一般心理学的活動理論においては、活動の担い手としての人間が問題なのではなくて、社会的諸関係の主体としての人間が問題なのである。それゆえに、人間の心理現象は、主体が活動を行う際に入りこんでいる彼の現実の生活、活動の諸関係、そして社会的関係の分析を基礎にして、考察されねばならない。換言すれば、心理現象は人格の社会的コンテクストにおいて考察されねばならない。ベトナム社会主義共和国(SRV)の状況にあてはめて考えるならば、人間(そして彼の心理的なもの、彼の意識)はわが国において起りつつある革命(生産諸関係の革命的変革、科学-技術革命、文化-イデオロギー革命)の前提であり結果であるという一般的理論的確認を考慮に入れることなしには、心理学研究は考えられない。」(P.284)

#### 4. 「活動」概念について

ハクとラズィホフスキーの共著である文献3は、ヴィゴツキーの初期著作のソビエト心理学における意義を扱ったものである。「活動」概念の発端はヴィゴツキーにあると考えるのは周知の事実であるが、いかにしてヴィゴツキーのなかにその構想ができあがっていったのかを、文献3によってみてみよう。

ヴィゴツキーが、ソビエト心理学界に登場してきたのは、10月革命および内戦の後であった。当時の国内的な混乱と新生社会主義の建設という現実とは、心理学者に対して、工業の回復と再建のための労働の心理学(психология труда)の発展を要求し、さらに文化革命、初中等教育の全面的再編、戦時中に放置していた子供の問題などを解決するために、児童心理学と教育心理学に対して新たな要求を提起した。このような状況下において、当時の心理学者たちは、問題を期待にこたえ

て解決するためには、それまで支配的であったところの、生活から遊離した、科学的根拠のない観念論哲学に基礎を置く心理学理論を、批判的に再構築することが必要であった。

また、ヴィゴツキーの指摘するように、当時の心理学は、二つの陣営へと大きく分裂していた。それは、自然科学的心理学と精神主義的心理学の対立であり、ヴントの記述的心理学とディルタイの了解的心理学の対立であった。両陣営の対立は、和解不能の観を呈していたが、ヴィゴツキーは、この対立は本質的には、唯物論と観念論の対立であるとして、対立の危機を乗り越え、独自の新しいタイプの心理学理論（ヴィゴツキー自身の言葉によれば、マルクス主義心理学）を創造するために、次のような研究プランを実行に移した。

- (1)現代心理学の流れを正しく方向づけるために、現代心理学の状況を分析すること。
- (2)具体的科学としての心理学にふさわしい弁証法的唯物論的な命題を仕上げるために、方法論的研究をすること。
- (3)心理学諸分野の特殊法則の諸現象を明らかにするために、実験室的研究によって新しい事実を収集すること。

このようなプランに基づいて始められたヴィゴツキーの、第一歩ともいべき業績は、次の2つである。

1925年 *Сознание как проблема психологии поведения*. (行動の心理学の問題としての意識)

1925-26年 *Исторический смысл психологического кризиса*. (心理学の危機の歴史的意義)

これらの論文の中で、ヴィゴツキーは、心理学が当面する危機から脱出するためには、人間の意識の問題を行動の心理学の中心問題とすべきことを提唱した。「意識は、行動（*Поведение*）の構造の問題である。（ヴィゴツキー、1925、c.181）」

ところで、ここでいう「行動」は行動主義の意味する「行動」とは異なる。1925年の論文で、ヴィゴツキーが「行動」という語を使ったのは次のような意味においてであった。第一に、行動は刺激に対する外的反応の体系に帰せられることはできない。「反射ではなく行動を、そのメカニズム、組成、構造を研究せねばならない。（1925、c.180）」さらに、ヴィゴツキーは、人間の行動と同義に、生活（*жизнь*）とか労働（*труд*）という語を使っていることからわかるように、行動という語のなかに、人間の実践的行動という意味を含ませている。第二に、動物の行動とは厳格に異なる人間の行動という意味で使っている。動物の行動には、経験の相続とか、個人により獲得された経験とかいうものはないが、人間の行動には、歴史的でかつ増幅された経験（*удвоенный опыт*）が含まれる。「人間は、肉体的に相続された経験のみを利用するのではない。われわれの生活、労働、行動は前の世代の経験の幅広い利用ということに基礎を置いている。それは、生誕を通じて父から子へと伝えられるものに尽きはしない。そういう経験を歴史的経験と呼ぶ。（1925、c.182）」また、動物では、行動は環境に対する受動的適応として実行されるが、人間では、行動は自分自身に対して環境を能動的に適応させるという形で実行される。「（人間の行動である——高取）労働は、手の運動や材料を変形させることにおいて、以前に労働者の表象の中でこれらの運動や材料のモデルとして実行されたところのものをくり返す。（1925、c.183）」この叙述に見られるところの、人間行動の必然的契機としての意識という考え方により、意識は行動の心理学の中心問題となりうるし、行動の構造の問題となりうるとヴィゴツキーは考えた。

以上述べたことと関わるわけだが、次にヴィゴツキーが行なったことは、人間の心理的生活の基本単位を探究し、発見するということである。それは、まさに、マルクスが「資本論」において、経済生活の基本単位を「商品」の概念のなかに見出したのと同様に、心理学者は、心理的生活を分

析するための基本単位を発見せねばならなかった。その単位を発見してこそはじめて、高次心理過程の真の分析が可能である。ヴィゴツキーがこのように考えた理由は、たとえば行動主義の行なうように、高次心理過程を刺激—反応 (S—R) の要素的成分へ分解することは、高次心理過程の質的独自性を失なわせることである。それは、ちょうど、水の分子を水素原子と酸素原子に分解することによって、水の本質が研究できないのと同じである。それを避けるためには、高次心理過程の質的独自性が保存されるような適当な単位 (единица) を探すことである。

人間の心理的生活のこの基礎単位こそが、「活動」である。ヴィゴツキーが1925-26年の論文の題銘に記したように、「建築家の無視した石 (камень) が最も重要なものになった」のである。すなわち、「建築家の無視した石 (=活動——高取) が、マルクス主義の体系的分析と結合されて、新しい心理科学という建物の最も重要な位置につくことになった」(ハク&ラズィホーフスキー, P.19) のであった。

## 5. 「行動」概念について

文献2では、ソビエト心理学から見た行動主義心理学に関する批判点が3点あげられている。第一に、「行動」には反応という意味は含まれるが、行為とか活動という意味は含まれない。ハクの文章を引用すると、「行動主義の研究においては、観察されるのは外的および内的刺激によって決定される身体運動のみであり、そのために、偽似行為 (quasi-action) のカテゴリーが生じている。要するに、行動主義には反応 (reaction) のカテゴリーのみがあり、行為 (action) のカテゴリーはない。したがって、活動 (activity) のカテゴリーがない。」(P.169) 第二に、「行動の誤まった理解のために、行動主義は心理学的現象を生理学的現象や生物学的現象に機械的に還元するという「行動主義的還元主義 (behavioristic reductionism)」(P.169) に陥っている。すなわち、行動の法則は生理学的法則や生物学的法則に還元される。よって、アンツィフェロフ (1974, 「外国心理学における唯物論的思想」P.59) の指摘するように、「哲学的基礎から判断すれば、行動主義は還元主義型の自然科学的唯物論」であり、「(この——高取) 還元主義は、独自の主題を失なわせることによって、心理学をおびやかす」(レオンチェフ 1972 「心理学における活動の概念」P.12) のである。さらに、行動主義的還元主義は、行動理論をつくるための鍵としてSとRの二つの要素とその結合を全面的に重視するという要素主義 (elementalism) と、有機体への刺激の影響と効果器に生ずる反応のみに注意を集中するという末梢主義 (peripheralism) の二つの側面を合せもっている。このためにハクが指摘するように、「還元主義の克服こそが、人間の科学的心理学を旨とする人々の今日的課題となっている」(P.170) のである。第三は、行動主義は記述的性格をもつ、ということである。この記述的性格は、行動主義心理学にとっては、真理は外から直接見ることのできるものであるという認識論から与えられるものであるが、そういう立場から得られる法則とは、直接的観察という手段により得られたデータの一般化に他ならない。

以上の論述をふまえた上で、行動主義心理学の代表者とハクが見なすスキナーの理論をどのように分析しているかを、文献4によってみていこう。

ハクは、スキナーの行動主義の概念体系のなかから、「オペラント」、「オルガニズム」、「文化」の三つを主要な概念としてとり出す。

まず、「オペラント」から見てみよう。スキナーは、オペラント反応は自発するものであり、オルガニズム自身により生み出されるものであると考えているのだが、果してこのオペラント概念によ

ってオルガニズムの能動性を主張することが可能であろうか。すなわち、オペラントの概念によって、オルガニズムの反応性（＝受動性）の原理を克服できたであろうか。これに対するハクの答えは、否である。「オペラント反応は、本質的には他の条件反応から何ら原理的に区別されえない。自分のオペラントをもってしても、スキナーはワトソン主義（行動の反应的、受動的性質——高取）から決して解放されはしない。というのは、人間行動を、オルガニズムへ直接作用する刺激に対する機械的・外面的な反応の総和に帰せしめるという点において、彼自身がまぎれもなくワトソン主義であることは明かだからである。」(P.74) すなわち、オペラント反応が、あたかもまったく刺激のない状態でオルガニズムが自発的に反応しているように見えても、その反応をひき起こす刺激は個々のオルガニズムごとには異なっている、実際には何らかの刺激が存在するのである。

さらにまた、オペラント行動は直接的強化がなければありえないということからも、受動的性質をまぬがれえない。スキナーの研究対象が、オペラント反応と強化という二つの変数間の関数関係とならざるをえなかったことからわかるように、強化（すなわち外部刺激のフィード・バック作用であり、これも刺激である）＝刺激と反応という行動主義の図式が、ここにも残存している。

以上のことから、「オペラント関係は、原理的に《インプット——アウトプット》の直線図式の限界を越えることはない」(P.75)し、スキナー理論においては、「S—R行動図式はその力を完全に保持している。」(P.75) したがって、「オルガニズムの反応性、すなわち受動性の原理もまた完全に保持されている。」(P.75)

スキナーのオペラント行動の概念が、人間行動へ適用されるとどうなるか。それは、ちょうど、スキナー箱とラットあるいはハトの関係が、社会と人間の関係へと転写されることになる。スキナー箱が、ラットにとっては能動的に働きかけている対象のように見えながら、実はラットはスキナー箱によって強化を媒介としてコントロールされているのと同様に、人間も社会によってコントロールされる受動的な存在でしかない。強化、オペラント行動、反応性の原理は、「スキナーの社会行動主義の基礎をなすもの」(P.75)であるが、スキナーにおいては、人間と社会とは互いに相いれないものなのである。レオンチェフが批判するように、「(スキナーの社会行動主義においては——高取)人間にとって社会は、人間が不適応にならないで生存するために、無理やり適応させられる外部環境のようなものにすぎない。それはちょうど動物が、外部の自然環境に無理やり適応させられるのと同じである。」(Леонтьев А. Н. "Деятельность. Сознание. Личность." 「活動、意識、人格」1975, P.83)

次にオルガニズムの分析に移ろう。スキナーにおいては、「オルガニズムは種々の環境に応じて種々のオペラント行動を産出するもの」(P.75)と考えられている。オペラント行動を産出するものとしては、人間も動物も区別はない。ヴィゴツキーが人間の行動と動物の行動を厳格に区別したのに対して、スキナーは動物の研究で得られたあらゆる結論を人間へと当てはめる。スキナーにとっては、「人間はイヌ以上の何ものでもなく、科学的（＝関数的あるいは行動主義的——ハク）分析の範囲内では、人間はイヌと類似している」(P.76)のである。

さらに、ソビエト心理学との著しい差異を示す点であるが、スキナーは、心理学は人格の本質とか、心理状態、感情、人間の性格などを明らかにすることはできないと考えている。したがって、スキナーによれば、心理学はその注意をもつばら行動と個体としてのオルガニズムの生活条件の間の機械的関係に集中すべきである。人間の内的構造を無視して、人間を単なる行動をひき起こすところの物理的システムとみなす思想は、ワトソンの考えた「分解できない原形質のかたまり」としての人間という思想をひき継ぐものである。かくして、スキナーによって、人間は「理想も目的も



計画もないままに行動するシステム以外の何ものでもなくなった」(P.78)し、スキナーの社会行動主義の完成によって、「人間の機能と役割を環境の作用によって完全に機械的に置き換える」(P.77)という地平にまで到達した。

最後に、文化の分析をみてみよう。スキナーにおいては、文化とは社会的環境であり、結局のところ、社会的状況に帰せられる。ところで、社会的状況とは、一人の人間が他の人間から受ける強化事象のセットにすぎない。ここでまた、強化という言葉が登場してくるわけだが、スキナーにとっては、一人一人の人間は他の人間との関係においては刺激であり、かつ同時に強化である。人間関係でさえもが、強化と刺激-反応関係にすりかえられていくわけである。だからハクが指摘するように、「諸個人は常に行動するものであり、環境に対する行為を自発し、社会的秩序を維持しつつ、これらの行為の結果に依存しながら自分自身で変化していくもの」(P.78)としてとらえられる。また、上に述べたように、文化とは人間が他の人間から受ける強化事象のセットであるからこそ、「文化は、文化を実行している人々の生存を促進するところの、人々の行動から成っている」(P.78)とも規定されうる。

スキナーにおいては、人間と社会との関係と同様に、人間と文化との関係もまた、人間にとっては生存のための強化を与えてくれるものにしかすぎない。そこには両者の間の複雑な相互変換や相互移行という考えは見られない。ここでもまた、レオンチェフの引用をしておこう。「人間は、社会を単に自分の活動を適応させねばならないところの外部条件としてだけ理解するのではない。社会的条件そのものが、人間の活動の動機や目的、さらに活動の手段や方法をもたらすということが主要な点なのである。換言すれば、社会が人間個々人を形成するところの活動をつくり出す。もちろん、このことは、人間の活動は、社会的諸関係や社会の文化を個人のなかにとりこむだけであるということを決して意味していない。社会や文化と活動とを結びつける複雑な変換や移行が存在する以上は、一方を他方に直接還元してしまうことは決してできないのである。」(前掲書、P.83)

スキナーのように、オペラント行動と強化の枠組でのみ人間と社会の問題、あるいは文化の問題をとらえてしまうと、たとえば、自由とか尊厳というような「人生の意義に関わるようなあらゆる問題は、強化のいかに帰せられてしまう」(P.80)のであり、単純明快ではあるが、無機的で機械的な結末に至るのである。まして、現代資本主義社会においては、社会の強化事象のセットを所有するのは資本家階級にほかならず、その他の多くの人間は、自己の運命をなげきながらそのコントロールをただ受けるだけの存在にしかすぎないのである。この点にこそ、スキナーが現代アメリカ社会で受け入れられる素地があるのであり、「社会行動主義と矛盾することなく、資本家階級は万能の強化を専有している」(P.81)のである。

以上のように、ハクはスキナーの社会行動主義のなかに、行動の反応的・受動的性質、「分解できない原形質のかたまり」としての人間、人間行動をコントロールする学としての心理学(スキナーのいわゆる社会工学)などの、行動主義心理学に本質的な諸テーゼを発見した。

## 6. まとめにかえて

これまで、ハクの所説を中心に、とくに「活動」と「行動」の二つの概念を検討してきた。しかし、両概念の差異についてはまだ十分には明らかにされていないと思う。そこで、これまで述べてきた部分から、それぞれの概念の特徴を示す箇所を拾い出すとともに、レオンチェフの「活動、意識、人格」の主第3章(「心理学における活動の問題」<sup>(10)</sup>)から該当する箇所を拾い出すことに

よって、両概念の差異の一覧表を試論的に作成してみたい。なお、表中、示されたページ数はレオンチェフのロシア語版の該当ページである。ページの表示のないものは、これまで本稿でふれてき

「活動」と「行動」の比較対照表（試論）

	活 動	行 動
意 味	生活過程 (P.81) 生活, 労働, 実践的活動と同義 生活の加算的単位ではなく, 全体的な単位 (P.81) 対象的世界において主体を定位させることをその現実的機能とするところの心理的反映によって媒介された生活の単位 (P.81) 人間の心理生活の基本単位	行為や活動ではなく反応, 身体運動
基本図式	3項図式 (P.81) (2項図式の間中に中間項 = 主体の活動とそれに応じた条件, 目的および手段を含む)	2項分析図式 (P.75) (主体の受容系に対する作用→この作用によって引き起されて生ずる客観的および主観的な応答現象) S→R図式 要素主義, 末梢主義
構造	内的な矛盾, 分裂, 変形をはらんだ過程 (P.12) 自己の構造, 自己の内的な移行と転化, 自己の発達をもつシステム (P.81) 階層構造をもつ (P.103) <ul style="list-style-type: none"> <li>活動——動機に従属</li> <li>行為——目的 //</li> <li>操作——条件 //</li> </ul> 活動は分析されねばならない	刺激に対する外的反応の体系 刺激に対する機械的・外面的な反応の総和 外部から観察可能なもののみを対象とすることから, 記述的性格をもつ 内的構造は無視される 人間は「分解できない原形質のかたまり」(ワトソン)
主体と客体の関係	主体と客体の両極の間で相互移行が行なわれる過程 (P.81) 主体と客体の弁証法としての活動 人間と環境との相互関係は活動的相互関係である	反応性, 受動性
意識との関係	心理的反映を生み出すと同時に, 心理的反映によって媒介されている人間の活動のモメントと一体化した形で心理的反映をその中にはらんでいるような分析単位 (P.13) 意識と活動の統一 意識は活動の必然的モメント	オペラントと強化ですべて説明可能であり, 意識などは仮定すべきではない (スキナーの場合)

人間と動物	厳密に区別する 動物の行動は、経験の相続とか、個人により獲得された経験という内容は含まない 動物の行動は環境への受動的適応である 人間の行動(=活動)は、歴史的でかつ増幅された経験を含む 人間の行動は、環境を能動的に適応させる	区別しない(スキナーの場合)
社会と人間	活動は社会関係の体系の中に含まれた系 活動の存在形態は、物質的ならびに精神的交通(Verkehr)の手段と形態によって規定される(P.82) 社会は社会を構成している諸個人の活動を生産している(P.83) 社会的諸条件そのものが、人間の活動の動機と目的、活動の手段と方法をもたらす(P.83)	人間の活動を、人間と、人間に対立する社会との間に存在するものとする(P.83) 人間個人と社会を対立させる考え方(P.83) 社会は人間をコントロールするという思想(スキナーの人間工学) 人間にとって社会は無理やり適応させられる外部環境 社会的環境は強化事象のセット

た部分からの拾い出しである。

### 注

- (1) 高取憲一郎 「ルリヤ心理学の現代的意義——ヘップとの比較を通じて——」ソビエト心理学研究, 23号, P.35-48, 1977.
- (2) アメリカのイデオロギーを直接批判した論文としては、フォン・ヒエンの「性の退廃と現代アメリカ文化——解放前の南ベトナムの生活をめぐって——」1974と「アメリカ的『消費』生活様式について」の二論文が岩名泰得(編訳)「ベトナム革命とマルクス主義哲学」青木書店, 1976に紹介されている。
- (3) 岩崎允胤, 島田豊, 芝田進午 「ベトナムとの学術交流について」唯物論研究, 2号, P.143-146, 1980
- (4) 岩名(編訳)前掲書 「ベトナム哲学の現状と課題」
- (5) 参考のために住所を記しておく。The Social Science Committee, 27 Tran Xuan Soan, Hanoi, Socialist Republic of Viet Nam
- (6) 「チャットホック」は1973年4月に第1号が創刊されたが、創刊号から現在までの心理学関係の論文をあげておく。なお、この文献リストは、岩名(編訳)の前掲書の「チャットホック」総目次、およびマルクス主義研究セミナー「マルクス主義研究年報」、合同出版、1977年版-1980年版の「海外のマルクス主義研究の動向」から抜き出したものである。  
 ドー・ロン 「新たな情勢における革命的意志の鍛練と心理学」 3号, 1973  
 ファム・タット・ゾン 「心理学の基本問題」 9号, 1975  
 ファム・ホアン・ザー 「心理学における人格の問題に関する初歩的研究」 10号, 1975  
 ドー・ロン 「マルクス・レーニン主義心理学と新しい人間の建設の問題」 11号, 1975

- ファム・ミン・ハク 「行動心理学における人間の問題と現代心理学の方法論の建設」 11号, 1975
- ハー・ヴィー 「児童の活動と心理的発達」 14号, 1976
- ファム・ミン・ハク 「スキナーの心理学といわゆるアメリカ的自由精神の崩壊」 15号, 1976
- ファム・ホアン・ザー 「ふたたび人格の問題について」 16号, 1977
- ファム・ミン・ハク 「行動心理学か, 活動の心理学か」 17号, 1977
- ファム・ホアン・ザー 「『人格』概念について, ならびに外部からコントロールされる人格の構成要因としての社会的評価について」 21号, 1978
- ファム・ミン・ハク 「マルクス主義心理学の対象について」 23号, 1978
- ハー・ヴィー 「児童の学習活動における認識過程」 27号, 1979
- (7) Congress Newsは宮嶋邦明氏(京都府立大)より提供していただいた。記して感謝する。
- (8) 革命後のベトナムの状況は, 本多勝一「ベトナムはどうなっているのか?」朝日新聞社, 1977. および吉沢南「ハノイで考える」東京大学出版会, 1980などにくわしい。
- (9) ガリペリンの「知的行為の多段階形成理論」については, 駒林邦男「現代ソビエトの教授—学習諸理論」明治図書, 1975の第6章に詳細な紹介と検討がある。
- (10) レオンチェフの原本は, Леонтьев, А. Н. "Деятельность. Сознание. Личность." Политиздат, М., 1975 であるが, 原本と合せてドイツ語版である Leont'ev, A. N. "Tätigkeit, Bewußtsein, Persönlichkeit" Stuttgart: Klett, 1977も参照した。なお, 訳文については, 黒田直実, 小島広光両氏の訳(ソビエト心理学研究, 16号, 1973), および西村学, 黒田直実両氏の訳(ア.エヌ.レオンチェフ「活動と意識と人格」明治図書, 1980)を利用させていただいた。

(昭和56年5月15日受理)